若い担い手に期待をこめて

― 教育機関と連携した普及活動の事例 ―

秋田県北秋田農林事務所　宍戸昭子（ししど あきこ）

はじめに

当北秋田地域は、県北部の内陸に位置する北部高山に囲まれた１市６町１村からなる典型的な内陸盆地である。森林面積では190,985haと県全体の２３％を占めるとともに、林野率８２％と県平均の７１％を大きく上まわっており、県内一の森林面積を有している。

このような地域にあって、林業後継者育成を促進することを目的に、県内唯一、林業専門の「林業科」が２クラスある秋田県立鷹巣農林高等学校の生徒を対象として、学校教職員と当事務所職員が連携し、現地・現場を活用した「森林・林業体験学習」を実施して今年度をもって１０年目の節目を迎えた。また、私も平成３年度に鷹巣農林高校に入学し、体験学習を経験しながら、平成６年度には目標であった県職員に採用され、平成８年度から当事務所林務課林業振興担当へ赴任となり、体験学習の計画立案から実施まで、４年間携わってきたことから、今までの実施状況と卒業生の進路状況調査や在校生に対するアンケート調査を実施し、今後の体験学習実行上、改善を要する事項について検討したので報告する。

１　体験学習開始の背景と内容

体験学習は、平成２年度に県林務部の重点施策として、戦後続けてきた造林事業の推進により確立された資源を維持し、林業生産の担い手の育成・確保のための事業が位置づけられたこと。また、その年、県立鷹巣農林高校の卒業生が林業職の公務員合格率、全国一位となったことが話題となり、このことを契機に当事務所林業改良指導員が学校の先生方と協議を行い、公務員合格率全国一位を確保する授業を持続させながら、林業後継者となり得る高校生に現地・現場を活用した森林・林業体験学習も授業に取り入れ、森林・林業の知識と技術を深めさせることを目的に開始された。

以来、当事務所職員と先生方との話し合いから、学校での机上授業や演習林を利用した実習と関連づけ、「現場で働く人の姿を見、働く人の話を聞き、実際に現場作業を体験する」を基本に据えながら、学年ごとに指導目標を表－１のとおり定めている。

表－１　各学年ごとの指導目標

- １年生は、森の働きや木材活用の理解を深めるため、木の一生について学ぶ。
- ２年生は、木材生産コストの低減、労働条件の改善等を図る高性能林業機械の必要性を認識する。
- ３年生は、授業及び体験学習のまとめとして、家屋の構造や木材のメリットを認識させる。

森林・林業体験学習の内容は表－２のとおりである。

表－２　森林・林業体験学習の内容

学年	開始年度	時　期	項　　目	主催	内　容
1	H 3～	6月	「森林・林業体験学習」（視察）	農林事務所	苗畑、原木市場、製材工場視察

2	H 6～	9月	「高性能林業機械体験学習」 （写真－１）	農林事務所	生徒が実際に機械操作 （ﾊｰﾍﾞｽﾀ、ﾌﾟﾛｾｯｻ、ﾀﾜｰﾔｰﾀﾞ等）
3	H 3～	8月	「職場体験学習」 （写真－２） 実際に農林事務所の業務を体験 6担当にわかれ２日間開催	農林事務所	林道、治山測量、 設計 間伐（現地、内業） 森林林業施設見学
	H 7～	7月～ 11月	「ﾛｸﾞﾊｳｽ建築体験学習」	林業後継者 連絡協議会 農林事務所	部材加工、組立、 上棟
	H 6～	10月	「植樹体験学習」	森林管理署 農林事務所	苗木の植栽方法 植栽実習（ｽｷﾞ）
	H 7～	11月	「間伐体験学習」	農林事務所	間伐木の選定
	H 3～	11月	「製炭体験学習」	農林事務所	原木運び、築窯、製炭
	H10	11月	「高校生実技実習（作業道）	農林事務所	測量、設計
	H 3～H 7	11月	「林業視察研修会」		県外視察
1 ～ 3	H 2～ H 7	1月	「森林・林業体験学習」 （林業講演会）		講師を招いての 講演会

写真－１　２年生高性能林業機械体験
（プロセッサを実際に操作している様子）

写真－２　３年生 職場体験
（林道担当の測量同行、ﾄﾗﾝｼｯﾄ測量を体験）

体験学習の指導目標のとおり、森林・林業について知識があまり身に付いていない１年生は「苗畑・原木市場・製材工場」の視察を行い、視察先で森の働きや原木から製品への活用などの説明を聞き、一生について学習する。

２年生は、林業労働力条件の改善と木材生産コストの低減を図る手段として、高性能林業機械の必要性を認識させながら、生徒一人ひとりが実際に最先端の機械を操作する体験学習（写真－１）がある。３年生は、授業のまとめと卒業後の進路を見据え、数回の体験学習を行い、「職場体験学習」では、将来公務員として働くことを希望している生徒が夏休みを利用し、当事務所林務課の林務担当、林業振興担当など６つの担当に分かれ、職場に２日間足を運び、職員の指導のもと、県行政業務を体験する。（写真－２）また、間伐材を使って部材加工から組立、棟上げまで数ヶ月間かけてログハウスを作り上げる「ログ

ハウス建築体験学習」、さらに原木を運ぶところから窯入れ、窯出しまで炭を焼き上げる「製炭体験学習」などがある。平成７年度まで実施してきた「林業講演会」については、大規模林業家や林業としいたけ栽培等、複合経営を実践している方々の講話で、生徒には聞き慣れない専門用語が多く、理解できないこともあり、この年をもって終了させ、「ログハウス建築体験学習」へ内容を移行した経緯もある。

２　体験学習開催の準備作業

体験学習開始に当たって、生徒に説明する資料の内容を理解し、担当する職員が自分なりにどのように説明するか検討すること。また、開催日程や年間スケジュールの決定に際して、林務課内の行事や学校の授業・行事とのすり合わせ、さらに、事業実施に協力いただく関係機関への協力要請、なかでも視察体験学習の苗畑、高性能林業機械の作業現場などの体験学習に適した現場の確保に一番苦労している。

関係者の承諾を得ることはもちろん、事前に現場の安全性の確認を行うなど、生徒や先生には見えない努力も大事な準備の一つである。

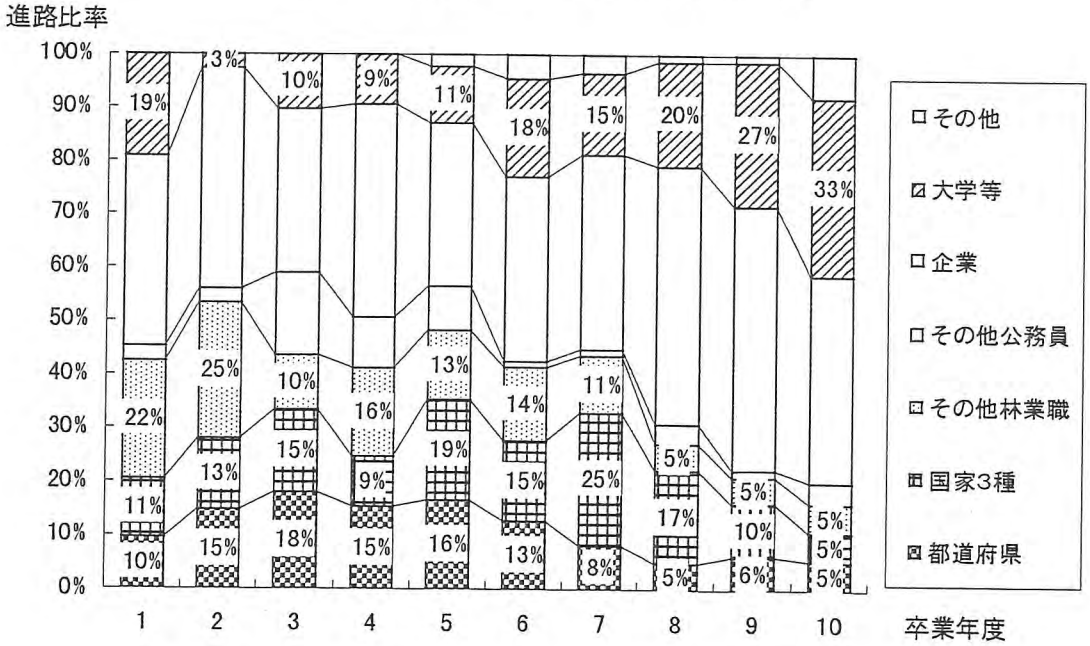
３　活動結果の状況

（１）進路状況

卒業生の進路状況を調査したところ、図－１のとおり体験学習が始まった平成２年度から平成７年度までの６年間は林業職の公務員をはじめとする林業関係への就職率が高く、体験学習を始める動機付けでもあった公務員合格率全国一位はこの６年間連続している。

最近では、不況が響き林業関係はもちろん、一般企業への就職率も低くなり、大学、専門学校への進学が増えている状況にある。将来、「その他」に分類されたアルバイト的仕事や大学等に進学した生徒の中から、林業関係の仕事へ就職する可能性もあり、今後に期待したい。

図－１　平成元～１０年度までの進路状況



（２）アンケート調査の状況

体験学習を在校生がどのように受け止め、どのような影響を与えているかを検証するため平成１１年度の体験学習が終了した１１月にアンケート調査を実施した。

表－３のとおり、「現在、行っている体験学習の中で一番興味があるものは何か」との問いに対しては、１，２年生とも当年度参加した体験学習が強く印象に残っていることがわかり、３年生は全部の体験をしているものの、見学するだけではなく、実際に労働を伴い日数を要した体験学習に興味を示している。

「体験学習でやって欲しいこと」について調査したところ、特にないが大方であり、自分から積極的に活動することが不得意で、選択肢を与えないと活動できない生徒が増えているのではないかと心配される状況を窺わせる。

「将来、林業関係の仕事に従事したいか」に対しては、学年が上がるにつれ、わからないの回答が減り、したい、したくない、とはっきり決定している傾向にある。

表－３　体験学習に関するアンケート集計結果

○調査対象：１年生～３年生　２１３名　　○回 答 数：１９１人（回答率９０％）

単位：％

Q　現在、行っている体験学習の中で一番興味がある体験は次のうち何ですか？	１年	２年	３年
①苗畑、原木市場、製材工場見学	３８	９	６
②ログハウス建築体験	１８	１２	１６
③職場体験	１１	１２	６
④植樹体験	２	２	４
⑤間伐実習	９	３	１２
⑥製炭実習	２	７	３８
⑦高性能林業機械体験	６	４８	１５
⑧無回答	１４	７	３

Q　他に林業に関することで興味があること体験学習でやってほしいことを書いてください。		
１　興味があること		
１年	１２％	測量。チェーンソー。木材加工。造園・園芸. 機械の操作。演習林。
２年	３％	機械運転。林業全体。
３年	６％	砂防ダム。木材加工。炭。白神山地原生林。
２　体験学習でやってほしいこと		
１年	１３％	木で何かを作る。植樹。機械の操作。伐採。
２年	７％	機械操作。ﾁｪｰﾝｿｰを使う。班編成して何かを作る。
３年	６％	ﾁｪｰﾝｿｰ。木材加工の実習。泊まり。白神山地視察。
３　特にない		
１年	７５％	
２年	９０％	
３年	８８％	

Q　将来、林業関係の仕事に従事したいですか？	１年	２年	３年
１　したい	８	３	１８
２　したくない	２２	４３	４７
３　わからない	７１	５４	３５

４　体験学習の改善事項

卒業生の進路状況やアンケート調査を踏まえ、今後の体験学習を実行するに当たり、改善を図る必要がある事項として次の三点が考えられる。

第一点、体験学習は３年生を主体として実施していたが、３年生になると早い段階で自分の進路を決定している傾向にあり、９月以降に行う体験学習ははっきりと進路が定まっていない１、２年生を主体に行う必要があること。

第二点、体験学習の内容を現場にきて初めて説明するのでは、生徒が深く理解できないまま終わる傾向にあること、また体験学習でやって欲しいこともほとんどないことから、生徒が単に授業の一環として「やらされている」といった感覚にあり、重要性の認識が不足しているようにも見え、今後、あらかじめ体験学習の内容や趣旨を説明してから現場に向かう必要があること。

第三点、今まで森林・林業に直結した体験学習を主体としていたが、広い視野からの森林・林業を考える場として、生徒と林業改良指導員が一緒になってブナ原生林や渓谷などを散策し、現地での会話ができる自然観察会を行い、森林の多面的機能と故郷の自然の重要性を認識させることが必要であること。

以上今回の調査では改善を要する三点が発見でき、今後の活動について考慮していく方針である。

なお、この結果については、学校の先生方へ報告するとともに、今後の改善の一歩として、２月に公務員志望の２年生２０名を対象に、民有林及び国有林に係わる公務員の職場環境や業務内容を学習させ、生徒の就職に対する取り組みの動機付けと意識改革を促すため、県庁林務部及び東北森林管理局の職場見学会を企画し実施する。

おわりに

体験学習によって、林業への就職率アップにつながったかと問われると回答はなかなか難しいが、アンケート調査で少数ではあるものの体験学習に参加し将来の就職を林業関係へと目を向けた、と言う生徒がいること。また、森林・林業における厳しい話題が続く中、高校生を対象とした体験学習がテレビ・新聞等マスコミに取り上げられ、地域に明るい話題を提供していること。など、体験学習の効果は確実に発揮されているところであり、今後林業後継者として期待される高校生たちに、林業の将来を託し、今後とも各林業関係者のご協力を得ながら、この体験学習が２１世紀にふさわしい活動として、安定的・継続的に実施していくよう努力したい。